

# 英国毛織物の価値を他国のものと比較評論す

平 林 豊 躬

## Valuation of British Woollen and Worsted Fabrics Compared With Those of Other Countries

by Toyomi Hirabayashi

It is generally said that British woollen goods are better than those produced in any other countries. I have often been asked by people who I know, why so great a difference in price exists between them, despite the fact that they are manufactured with the same material as we use. Since I think that there are some reasons to acknowledge these facts, I will therefore write on this subject in this report.

But as these explanations are of course no more than a study by personal inspection and a consideration of various circumstances in Great Britain, I hope to glean further intelligent information, based on reasonable facts, if such exist.

### 緒 言

一般に英国毛織物は他の国々の製品に較べて良いといわれています。私はこれまで屢々私の知っている人々から聞かれたことは、何故同じ羊毛を用いて造った毛織物の価格に、英国品とあんな大きな格差があるのかということです。

私が思うにこれには、この事実を肯定する種々の理由があるので、以下本文にこのことに就いて執筆します。然しこれ等の説明は私の見学とか英国における環境、諸事情などを考えた上の私見に過ぎないので、まだほかに理由となる事実があるならば、識者の補遺をお願い致したいと存じます。

1966年9月

### 英国における毛織物製造工業の歴史

10世紀(961~989)のころ、フランダース(ベルギー、オランダ、東北仏、西部独)にはすでに羊毛を原料とする織物工業が起っていました。これは毛織物としては厚地ものの製造工業であったのです。文献によりますとその後1106年フランダース地方に大浸水があって、フランダース人は多数英国に逃避したということですが、そのときこれらの人々は毛織物の製造技術を持って英国に渡ったのです。

ちょうどこのころ、英国では牧羊が行なわれていて、時の王侯から牧羊を奨励されていたので、これらの羊毛によって英国には毛織物の製造が起り始めたのです。

12~13世紀には、ダービー、レスター地方に毛織物の製造工業が起って、リチャード1世、エドワード3世などおおいに奨励したとのことです。

このように、英国では古くから牧羊とあいまって毛織物の製造が行なわれていました。14世紀

(1315年)となってウーステッド (worsted) 地区のノーフォークで、はじめて梳毛糸 (worsted yarn) の紡績が開発されて、これを製造するようになり、従来の厚地の紡毛織物 (woolen fabric) のほかに、薄地梳毛織物 (worsted fabric) も製造されるようになって、画期的な進展をとげたのです。そして産業革命時代に移ってから、家内工業が蒸気機関の発明とともに機械的工業にかわったことは、いうまでもありません。

このことをみましても、英国国民は古くから紡織工業に深い関心を持ち、その発明改良に不断の努力を続けて、伝統的に繊維工業を育成発展させたのですが、これで英国は繊維工業の世界の先進国として自他ともに許すようになったのです。

英国の毛織物を評価するに先づ身近な日本の毛織物と比較する場合と欧州大陸並に米国等におけるものと比較することとする。

先づわが国の毛織物の事情を考えてみますと、明治以前には国民は毛織物については、ほとんどなにも知らなかったのです。

毛織物の製造工業もなく、ようやく明治12年に千住に毛織物の官営工場が創立されたのがその始まりです。(この工場は千住製絨所と称して終戦当時まで陸軍の軍絨製造工場でありました) この時代は、いわゆる明治の文明開化を謳歌した時代で、種々の近代工業が欧米から輸入された時代でした。

わが国で牧羊が初めて行なわれたのもこの時代で、明治8年千葉県に官営牧場が設けられ、ついで明治10年には千葉県三里塚に御料牧場が設けられて、英、米、濠、仏からメリノー羊を輸入して放牧しています。

その後、日清、日露の戦役後民間でも毛織物工業は起りましたが、本格的に発展したのは第一次欧州戦争当時になってからのことです。つまりこの戦争で欧州諸国は戦争に没頭して毛織物工業に従事する余裕はなくなったのですが、当時わが国としては大勢において戦争圏外に立っていましたので、毛織物の需要を充当するために全力をあげて増産したのです。この時代から真に国際的に毛織物工業国として列することができるようになったのです。

以上のように、毛織物工業の起源、並びにその発展の歴史をみますと、英国と日本とではその歴史に著しい間隔があるのです。

つぎに庶民の織物の消費について考えてみますと、英国に限らず欧州では繊維資源の関係で古くから毛織物が庶民の被服として用いられていたのですが、わが国においては羊毛がなく、綿花も近世まで移入されなかったもので、永い間庶民の間では紙や麻が被服原料として使用されていたのです。このような事情で庶民では毛織物の消費が皆無であったことは、日本の毛織物工業のブランクであった理由でもあります。

## 毛織物工業地としての環境

前に述べました通り英国の毛織工業は古い歴史もあり保守伝統的な国民性からそれに対して誇りを持っているし、また国民の支持を受けていますので、おのずから世界の毛織工業の本場の環境となっているのです。この環境があればこそ、技術者や工員の人的資源は豊富であり、技術の進歩発展も可能なのです。この点は日本の国内でも同じケースがあります。

ご存知の通り尾張一の宮市を中心とする名古屋から大垣附近までは、日本における毛織物工業の中心地です。この地方の人々は、毛織事業に関しては非常に熱心で、原料、染料、薬品、製品等の

商業上の強い協力もあり、毛織事業一色に塗られた感がありますので、毛織工業の環境が立派にできており、技術者や工員の人的資源にも困まらないし、事業も発展し、ますます優良製品が出るのです。

これに反して環境のできていないところでは、熟練した工員はもちろん、普通の工員でさえも満足には得られないのですから、こんな地方では良い製品ができるはずがないのです。

このように、環境できることはその産業にとっては非常に大切なことで、業者の研究心を昂上し互に琢磨、研修して、製造技術の向上はますます製品を優良化するのです。以上の点から考えても英国の本場では自ら優良製品ができる大きな原因ともなっています。

次に英国製品を品質のおよび技術的にみた点を述べてみましょう。

### 英国の羊と羊毛

英国における牧羊と羊毛の生産が非常に古いことは前述の通りですが、牧羊はいまなお盛んで、国内にも牧場が多く、羊群のみえるのはほかの欧州諸国にくらべて、目立って異なって旅行者の眼に映ります。

英国で飼育されている羊はいわゆる英国種の羊と称するもので、これには亦いろいろの種類があります。たとえば、リンカーン、レスター、ロムニーマーシュ、チェビオット、シュロップシャー、サウスダウン、ドーセットホーン、ウェルシュ、その他です。これらの種類から苧り取られる羊毛は濠州、南阿連邦、ニュージーランド、南米などにおいて産出するメリノー羊毛、雑種羊毛とは異なった風合を持っているのです。

| 年次       | 羊の頭数<br>(単位百万頭) |         | 羊毛の産額<br>(単位百万封度) |         |
|----------|-----------------|---------|-------------------|---------|
|          | 1958~59         | 1957~58 | 1959~60           | 1958~55 |
| 濠州       | 152.7           | 149.3   | 1,690             | 1,591   |
| ニュージーランド | 46.7            | 46.0    | 565               | 540     |
| 南阿連邦     | 38.4            | 38.2    | 319               | 314     |
| アルゼンチン   | 48.1            | 46.9    | 434               | 421     |
| 英国       | 27.7            | 26.1    | 128               | 119     |
| フランス     | 10.6            | 11.1    | 55                | 52      |
| イタリー     | 8.6             | 8.5     | 32                | 32      |

元来毛織物のもつ風合はその原料である羊毛のもつ風合に基因するところが非常に大きいのですがこれらの羊毛を使用することによって、英国風の毛織物ができるのです。この英国種の羊の頭数および羊毛の産出額は前表に示す通りで、その国土がヨーロッパではわずかであるにもかかわらず、牧羊の盛んなことは他の世界主要産毛国

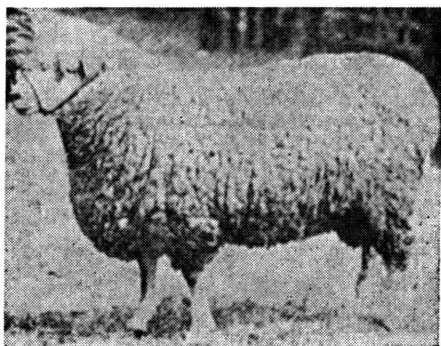
に比較してあまり劣っていないのです。

### 英国で使用される毛織物の原料

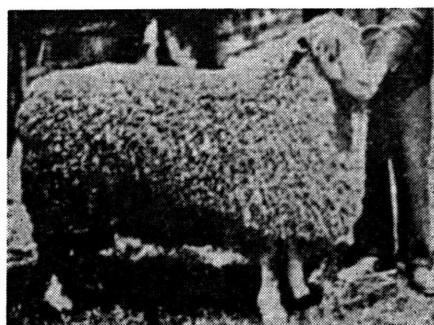
英国で生産される毛織物の種類はわが国と異り、その種類の幅が広い。したがってそれらに使用される原料も、羊毛のほか、駱駝毛、カシミア毛、モヘア、ビキュナなどそれぞれ特殊の風合を持つ獣毛を使って高級毛織物を生産しています。これは国内の消費者の経済的に裕福な事情があって英国ではこれら高級なものを生産しても売れて行くでしょうし、またいわゆる“しにせのれん老舗の暖簾”で、海外からの注文によって作っていることと思います。この点、わが国では使用原料はだいたい単純で濠州、ニュージーランドより輸入した羊毛を使用していますが、特殊の風合を持つ獣毛など

を使用するところまでいっていないのです。これは単に技術や経験だけの問題ではなくて、やはり英国の羊毛工業の暖簾がそうさせるところなのでしょう。

英国種の羊の種類図



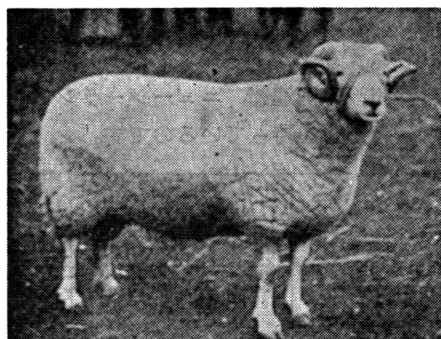
Leicester sheep



Lincoln Ram (about half growth)



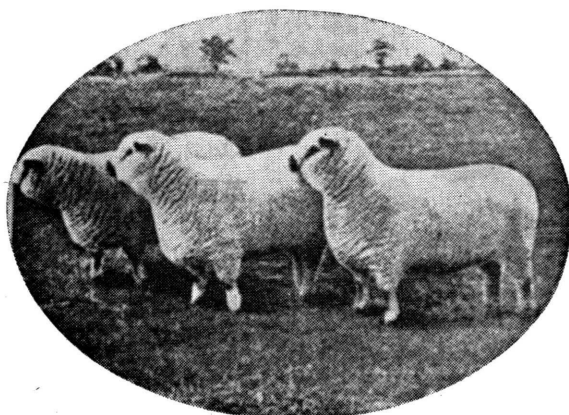
Romney marsh sheep (Kent sheep)



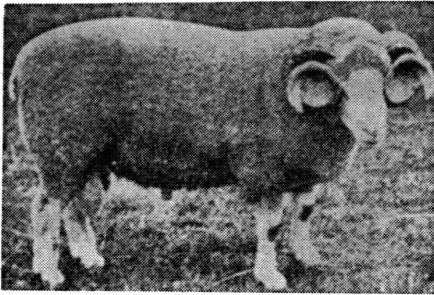
Welsh mountain sheep



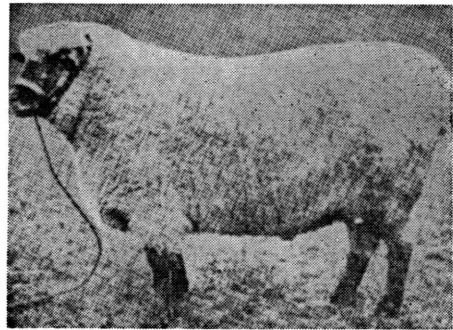
Scotch black face sheep



Shropshire down sheep



Dorset horn down sheep

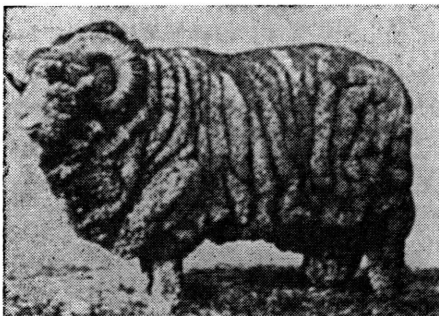


Oxford down sheep

### 英国の工場で使用される羊毛の場合

次に、使用する原料が羊毛である場合を比較してみますと、一般に紡毛、梳毛の原料ともに、英国では比較的繊維の長い羊毛を使用している事は事実です。これは英国内の産毛である英国種の羊毛は繊維の長いものであり、また濠州、南阿連邦より輸入するメリノー羊毛のような短毛種のものであっても、比較的繊維の長いタイプのもものが英国では使用されているのです。

濠州および北米ヴァーモント・メリノ  
雑種雄羊



Australian × Vermont merino ram

これら長い羊毛を紡績して糸にする場合に、たとえば能率は劣るし、コスト高にもなるのですが、この繊維を切断しないように紡績する方法が英国での特徴です。

このようにして出来た糸は、梳毛糸ならばキャップヤーンといい、繊維の比較的長い梳毛糸となります。また紡毛糸ならば原料に長いものを使って、繊維を傷めない紡毛糸とするのです。

羊毛の買付の状況をもみても英国筋には長めの梳毛糸用原料が買付けられ、日本と欧州大陸筋では一般には短めのもものが買付けられているのです。

### 機械の型と能率の関係

英国では一般に毛足の長い羊毛を使用しているのに反し、日本および欧州大陸では一般には毛脚の長くないものを用いています。

毛織物は羊毛で毛糸を作り、さらにこれを織って整理工程（仕上げ工程）を経て、初めて毛織物となるのですが、まず毛糸を作るために、綿状に塊っている羊毛を繊維一本ごとに完全に開毛する工程があります。これに使用する機械を開毛機（carding machine）といいます。この工程で開毛機に羊毛をかけて塊を開くときに、かなり多く羊毛が切断されるのです。

この機械の型と取扱いが英国と日本（欧州大陸も）とではおおいに異なっています。すなわち英国ではせっかくの長い繊維を切断させないために、遅い回転の機械を使用して、羊毛に無理をさせず

に徐々に開くので羊毛の切断は少ないのです。ただし生産や能率は比較的あがりません。日本および欧州大陸では、英国のように長い繊維を使用していませんから、速い回転の機械を使用して作業の能率をあげて工費を安くするのです。梳毛糸の場合は以上の外に、英国型の梳毛紡績機械で糸を作るのですが、これによって作られた毛糸は cap yarn といって日本型（大陸型）で作った毛糸よりも一般に繊維は長くなっていますし、また製造工費も高くなるのです。

原料とか糸作りばかりでなく、毛織物を仕上げるうえにおいてもやはり同様の考慮が払われている事はもちろんです。

元来、毛織物の整理（仕上げ）加工では、高級の毛織物には工程を非常にていねいにまた繰返し行なうし、安物の毛織物には手を抜いて工費の安くなるように加工するなど、加工の手加減で毛織物の生産価格に著しく格差を生じるものです。ですから英国製の高級ものには整理（仕上げ）をていねいにやっているものと思われましますし、またロンドン・シュランク（防縮加工）の加工を行なうと、品質の保証をしているのが普通です。

防縮の必要な理由を説明いたしますと、羊毛は毛糸に作られ、毛織物に織られるまで常に繊維に緊張が与えられて伸して加工されていますので、羊毛繊維は事情が許せばいつでも元の状態に戻りたいのです。これが毛織物の収縮する大きな原因です。

ロンドン・シュランクは羊毛にこの希望を満足させて毛織物に収縮を許すことです。英国で行なわれている方法は極めて簡単なもので、織物にでき上がったものに行ないませんが、まず毛織物を1ヤールずつに折りたたむのですが、このとき濡らして脱水した厚目の綿布をいっしょにたたみこみます。これを一夜くらいそのまま放置しておきますと、毛織物は湿気をじゅうぶんに吸収しますから折りたたみを解除して屋内で竿にかけて自然乾燥をします。この工程によって、羊毛繊維は落ちつくところに落ちついて再び収縮しようとはしません。こうした毛織物は、洋服に仕立ててから収縮や型くずれがないのです。

これらの事をいいかえれば、英国の行き方は原料も良いが工費も高く、また品質のためならば織物の長ささえも収縮して販売するという事になります。一方日本では原料も安く、工費も安いという事になります。

## 世襲の工員

どのような種類の従業工員にも個々の技術は大切なものですが、毛織物の製造にも工員個々の技術が製品に非常に影響します。たとえば未熟の工員の手で製織されたものは織物がキレイに織れないのはもちろん、廢物を作ったり、また能率が低くて生産は上らないのです。この点英国の毛織物工業は、優良品を作ることは日本にくらべて、はるかに恵まれていると思います。

もともと英国は保守的な国民であり、同一の職種を世襲的に受け継いでいる例は大変多いのです。たとえば、自分の職業は父も祖父も代々やっていたし、またその技術も世襲的に秘伝を受け継ぐことができるのです。そして次の世代にはこれを基礎としてさらに、自分で技術と経験を積んで研究することができるのです。

それでは日本の状態はどうかといいますと、職業に貴賤の別をつける風習が強いから自分は工員をしたが、自分の子供にはさせたくないというのが普通のようなのです。ですから、せっかく一生かかって得た技術も秘伝も一世代で消滅して、さらにほかの若い工員が始めから同じことを繰り返して技術と経験を積んで行く場合が普通です。このことは優良製品を作る上において実に測りしれない

得失があります。

## 欧州大陸と羊, 羊毛

欧州大陸の羊は主として短毛種メリノー羊のことである。此羊の祖国はスペインとされている。 (此羊の古代の祖先は黒海沿岸であるがスペインで発展した羊) 1500~1700年頃には1,000万頭に達し、長毛種の英国と共に二大牧羊国とされていたのです。此羊は短毛ではあるが、柔くて細くて優秀の羊毛であるためスペインは1400~1723年までこれの輸出を厳禁し、犯したものは死刑を以って罰せられたといわれています。1723年初めて禁を解いてスウェーデンに輸出して以来各国は永年渴望していたのでメリノー羊は欧州各国に流出することとなった。それ以来ドイツ、オーストリー、ハンガリー、フランス、英国 (英国では気候の関係で失敗した) 各国に飼育され欧州大陸はメリノー短毛種が普及することとなった。メリノー羊は欧州のほか、更に広大な殖民地、濠洲、南米、北米、南阿殖民地等にも輸出され現在では羊毛の生産は主として南半球となったのです。

## 欧州大陸の毛糸, 毛織物等

欧州大陸の毛織物を作る技術は決して英国に劣っている訳ではない。また毛織物製造に必要な機械とか染料、薬品などは英国を凌ぐものがあります。欧州での生産地はドイツ、ベルギー、イタリア、フランス等でドイツ、スイスなど進歩した機械染料、薬品など次々と新しいものが出現しているが、此点英国の方がむしろ保守的であって、英国の機械は決して進歩したものではありません。むしろドイツの機械は進歩したもので能率的で取扱いも便利である。

然し毛織物を作る根本的の方針に異った所があります。英国は永い年代に亘って七つの海を支配した富み栄えた国民であり、世界各地から優良な羊毛獣毛などが豊富に入荷する、これらの原料を傷めないように仮令能率は多少低下しても良品を作りたい気持ちにもなるでしょう。その上老舗の暖簾の七光りは、米国始め世界の贅沢階級の消費者の注文が集中するから値段は少々高くとも売捌ける状態です。

欧州諸国は国民の経済的事情が日本と同じですから、高級品はそうは売れない、従ってメーカーも能率本位で短めの原料で立派に見えるものを作るところに根本的に異っているようです。

これを製品の実物にもとずいて例を挙げてみましょう。例えば梳毛糸の場合

梳毛糸はある一定の長さ以上の羊毛を伸して平行に並べて作る糸であります。英式紡績法では糸を構成する羊毛繊維が平均に長く、また製造工程で短い繊維を屑として出す率も多いのですから元の原料も長めの羊毛を使用します。これに反して大陸式紡績法 (日本も同じ) では糸を構成する羊毛繊維が平均に短く、屑として出る繊維も英式のものよりも短いもののみがでるので、元の原料も英式ほど長くなくともよい訳です。

前者でできた糸はキャップ糸となり、後者の糸はリング糸となる。其故キャップ糸はリング糸よりも長い羊毛で紡績されていることになる。ただ茲で注意すべきことは織物によってはキャップ糸よりもリング糸が適する場合もあります。

梳毛糸はサージ、ギャバディン、ポーラ其他ウーステット服地など用途は甚だ広いものであります。

次にツイード織物に例を取って見るに、これは一般に紡毛糸で製織するもので原料としては英国

種の羊毛を用いて造るのである。それゆえ日本などでツイードを製造する場合は、わざわざ英国羊毛を輸入して造りますが、前述の“機械の型と能率の関係”の処で述べたように糸を構成する繊維の長さに格差が生ずるから英式の機械では繊維の長い糸ができるが価格は高くなります。

### 米国における毛糸、毛織物等

米国の羊毛工業は重工業、化学工業に比して小規模のもので、羊毛製品は英国および欧州大陸、日本などよりも輸入している、羊毛工業はボストンおよびフィラデルフィアを中心とする東部地方であります。

製造方法は英国型および大陸型を取り入れた方式で行われているので、英国製品と比較対象とするのは適当でない。

### 毛織物製品の品質と取引値段との関係

製品の品質は技術的問題とは別に、国内の取引の事情によって、著しく影響があるものです。我国のように生産過剰の国では、製品の値段が通らないために、メーカーとしては何んとか安く生産しなければならないこととなります。これがやはり製品が悪くなっても、良くなる。つまり安かろう、悪かろうということになるのです。

しかしこれは一般的話であって、日本とても名の通ったメーカーは、信用を落すような製品は作らないし、また、同等の品質の毛織物にしましても中小企業会社の製品よりも名の通ったメーカーの製品は値段が通るのです。これは信用の力でありましょう。

英国の毛織物製品が、世界的に高値を維持できるのもこれと同じ理由で、前にも述べましたように、種々の原因で品質の良いものができるのでありますが、また信用と力でもありましょう。

いつか新聞で散見したところですが、米国に輸入される毛織物は英国、日本、イタリー、などがおもな国ですが英国製品は一流の店舗で取扱われ、他国よりも高価に扱っているとのこと。

### む す び

何上列挙した、いろいろの事柄について考えて見ますと、英国が歴史的に永い間に築き上げた、いわゆる“老舗の暖簾”<sup>しにせのれん</sup>は一朝一夕に他国がこれをまねることはできない事実であります、それだからこそ英国製品は優良品として高値を維持して行けるのです。英国風の毛織物の高級品は確かに、ほかの国の羊毛製品よりも良いが、また価格も高くなっております。それではほかの国で同等の品質のものできるかどうかの問題ですが、技術的にはできると思います。と同時に製品の価格も高くなります。

然し英国品と同等の価格では恐らく売れないと思います、引合わない取引きでは結局製造して行けないこととなります。またそんな冒険する企業家もないでしょう。やはり老舗の暖簾の力は偉大なものがあります。